

# 文心雕龍札記 (三)

## 宗經第三

「三極彝訓、其書曰經、……譬万鈞之洪鐘、無錚錚之細響矣」(第一段)  
この一段は、經書を總括的に讚へたものであつて、自ら四節にわかれる。

最初から「洞性靈之奧區、極文章之骨髓者也」までの十一句が第一節で、「經」の意味と特色とを述べてゐる。

「三極」の語は、周易、繫辭上に見え、その注に「三極三才也」とある。即ち天地人の三材を謂ふのである。ここもその意味であらう。「彝訓」の語は、尙書、酒誥の傳に「常教」と訓ぜられてゐて、その「常教」とは、蓋し「日常の教訓」の意味であらう。ところが、この、「彝訓」は、寧ろ「恒常の教訓」の意味かと思ふ。下文に「恒久之至道、不刊之鴻教也」といへるにて、そのことがわかる。論說第十八の「聖哲彝訓、曰經」もこの同じ用法である。「經也者」の「也者」の形は、本書に於ては、そのものについて、内容の上からの本質を説く場合に用ひられてゐて、その語の通転を説く場合には「一者」の形をとると、區別されてゐるやうである。この「經」を以て「不刊之鴻教」となすの言ひ方は、恐らく、晉、杜預の春秋左氏傳序にある「左丘明受經於仲尼、以為經者、不刊之書也」に本づいたのであ

## 斯波六郎

らう。ところで、左伝序の「不刊」は、その疏にも「是不可刊削之書也」とあるやうに、「削改すべからず」の意味である。そのことは序の前文に「仲尼……其教之所存、文之所害、則刊而正之、以示勸戒」とあるにても知られよう。然るに、この用法は、「不可削改」といふよりも、寧ろ「不変」とか、「不朽」とかの意味あひが濃いのではなからうか。といふのは、さう解釈した方が、上句の「恒久」との対がしつくりするのみならず、總術第四十四に「六經以典與為不刊、非以言筆為優劣也」とある、その「不刊」も亦「不変」とか「不朽」とかと解した方が、文意が順だからである。「參物序」の「參」は「參與」の「參」ではなく、「參稽」(荀子、解蔽)「參察」(後漢書、郎顛伝)の「參」で、ひきあはせて、しらべるとか、ひきあはせてためすとか、かんがへあはすとかの意味であらう。「物序」は自然界の秩序、即ち日月四時の運行等に見られる秩序を謂へるものであらう。そこで「象天地(A)、效鬼神(B)、參物序(C)、制人紀(D)」四句の關係を考へるに、文の口調の上では、AとBと対し、CとDと対してゐるが、意味の上では、A・B・C、一聯となつてDにかかつてゐる、つまりDが中心となつてゐるやうである。そしてそれを承けて、總括せるのが「洞性靈之奧區」(E)と「極文章之骨髓」(F)の二句であらう。即ち、「洞性靈之奧區」は、人間のたましひの

奥底までも達してをるといふ意味であつて、経書の内容の深さを謂ひ、「極文章之骨髓」とは文章の真髓を最上に發揮してをるといふ意味であつて、経書の述べ方の優れてをることを謂つたのである。「洞」は、「貫洞」の「洞」と見、「つらぬく」と訓じたい。この節の最後にある「者也」は、AからFまでを承けてをる。

ところで「経也者、……不刊鴻教也」と「象天地、……極文章之骨髓者也」との関係であるが、彦和はこの兩者を結ぶに「故」を以てしてをる。つまり、「経は恒久の至道であり、不刊の鴻教である」と先づ前提を定めてかかつて、そして「だから」経は「天地に象り、鬼神に效ひ、物序をかんがへて、人の網紀を制し、……たもものである」とその恒久の至道であり、不刊の鴻教である所以の特色を抽出したのである。ところがこれを論理的に考へれば、「天地に象り、鬼神に效ひ、……たもである」からこそ「恒久の至道」となり、「不刊の鴻教」となり得るのである。だから、かかる論理の立場から彦和の立論を批判すれば、その前提は彼の独断に過ぎぬと謂はねばならない。がしかし、若しこの「故」を「何故ならば」の意味に解し得るとすれば、彦和の立論は論理的に筋が通ることになる。一休、本書には、吾人の考へ方に従つて論理の筋を述べれば、「何故ならば」（何以明其然）と解した方が都合のよい「故」に、出会ふことがある。かかる「故」については、既に徵聖第二の札記に於て述べておいた。けれどもこの「故」はやはり普通の用法と見、「経也者、……不刊之鴻教也」は、伝統的考へ方に基づける堅い信念を真向から振りかざしたものと見るのがよいであらう。

「皇世三墳、帝代五典」から「自夫子刪述、而大寶咸耀」までの八句を第二節とする。墳典索邱から五経の成立までを概説してをるが、中心は最後の二句にある。

「大寶咸耀」。唐写本も御覽も「咸」を「啓」に作る（抄勘記）。「啓」の字が是であらう。「條流紛糅」して今迄耀を匿してゐたものが、夫子の刪述を経て、はじめて耀を發したといふのである。この「大寶」は寶玉の意味と

見ればよい。

「於是易張十翼、書標七觀」から、「故能開學養正、昭明有融」までの九句を第三節とする。夫子刪述の効能を述べ。

「易張十翼、……春秋五例」は、「大寶啓耀」の実を列挙したのである。「十翼」なる故に「張」といひ、「七觀」なる故に「標」といへる点に注意。「七觀」については、黄注・范注ともに尙書大伝を引いてをるが、孔叢子、論語篇にも尙書大伝とほぼ同じ記事がある。「詩列四始」の句は、毛詩序「是以一國之事、繫一人之本、謂之風、言天下之事、形四方之風、謂之雅、雅者正也、言王政之所由廢興也、政有小大、故有小雅焉、有大雅焉、頌者美盛德之形容、以其成功告於神明者也、是謂四始、詩之至也」に本づいたものであらうが、ここはただ、風・大雅・小雅・頌の區別を明かにせしことをいへるまでであらう。

「義既極乎性情、辞亦匠於文理」。この「極」の字について、范注に「趙君万里曰、唐寫本極作挺、御覽六百八引作挺、以下文辞亦匠於文理句例之、則作挺是也、唐本作挺、即挺字之譌」を引用してゐるが、趙説是である。「挺」は音「セン」（老子釈文、始然反）陶瓦器を作る型のこと。管子、任法篇に「昔者堯之治天下也、猶埴之在埴也、唯陶之所以為」とある。動詞としても用ひられ、老子、第十一章「埴埴以為器」、荀子、性惡篇「故陶人埴埴而為器」、齊策三「埴子、以為人」等がその例。「匠」は工匠の匠で、木を治める人、大工の類。この字も名詞としても使はれ（書記第二十五、神思第二十六等）、動詞としても使われる（章句第三十四）。さてこの「挺」も「匠」も、名詞として使はれてゐるのではあるまいか。即ち、「為埴……、為匠……」の意味を表はしてをるものと思ふ。而もこの「匠」は平凡なる工匠ではなくて「良匠」とか「宗匠」とか、ともかくも優れた「匠」を意味してゐるやうである。或ひは、莊子の「匠石」を念頭において使つたのかも知れない。それで、この二句は「五経の義（内容）はもとより性情を陶冶する模型であり、その辞（文章）も文理を裁制する宗匠だ」といふやうな意味では

ないか。彦和は経書をば、人間完成の上に於ても、文章上達の上に於ても、理想的の範であるとして見たらう。風骨第二十九に「經典之範」、才略第四十七に「経範」の語があるのもこと同じ考へ方の表はれである。

この二句は、「易張十翼……春秋五例」の結果、五経に備はるやうになつた特質を既括したものであつて、上文の「洞性靈之奥區、極文章之骨髄」と照慮し、又、原道第一の「雕琢性情、組織辭令」とも遙に呼應してをる。

「故能開學養正、昭明有融」は、天子がかかる五経によつて賢者を養成すればその光明が長久（又は、光明あつて又長久）である、といふ意味でもあらうか。「開學」とは學校を公開して人材を入れることではあるまいか。

「養正」の語は、周易、蒙の家伝及び頤の家伝に見える。その後者は「頤貞吉、養正則吉也、觀頤、觀其所養也、自求口實、觀其自養也、天地養万物、聖人養賢以及万民、頤之時大矣哉」とあるのがそれである。その「養正」は、賢者を養ふの意味、少くともさういふ意味をもこめてをると解し得る。現に正義にも「其養正之言、乃兼二義、一者養此賢人、是其養正、……、二者謂養身得正、……以此言之、則養正之文、兼養賢及自養之義也」とある。そこで彦和のこの用法は「養賢」の意味かと思ふ。「昭明有融」は、詩経、大雅、既醉の文。その「有」を、毛伝は字のまま解し、鄭箋は「又」と解し、「融」を、伝・箋ともに「長」と解す。

「然而道心惟微、聖謨卓絶」から「譬万鈞之洪鍾、無錚錚之細響矣」までの六句を第四節とする。五経が深奥くてわかりにくいことを述べる。

「道心惟微」は、原道第一の贊にも用ひてゐて、偽大禹謨からとつたのであることは言ふまでもない。偽孔伝に「微則難明」とある。これも、五経に盛られてゐるところの道心は微妙であるから、容易に明かにしがたいといふのである。

「聖謨卓絶」は、五経を刪述せし聖人の考へが餘りにすぐれてゐるため容易にかがひ知り難いといふのである。そしてこの「道心云々」の二句を

暗喩的に述べたのが「嚮宇重峻、而吐納自深」である。「嚮宇」の句は「道心」の句を承け、「吐納」の句は「聖謨」の句を承けると見てもよいであらう。「吐納」の語は本書にしばしば用ひられ、当時の他の文章にも見えるが、多く、「吐」の方に重みがあつて、ことばを出すことの意味に使はれてをる。しかしこれは、いきづかひの意味であらう。さう解すれば、この用法は、道家の用ふる「吐納」（深呼吸）に近いことになる。尤も、この「吐納」も、吐き出したものと解しても通ずるであらう。

「夫易惟談天、入神致用、……可謂太山徧雨、河潤千里者也」（第二段）前段の最後の節が「譬万鈞之洪鍾、無錚錚之細響矣」と結ばれてゐるやうに、五経の文は奥深いので、この段に於ては、五経の文体のそれぞれの特徴を説いて、その奥深い所以を明かにする。

「夫易惟談天」から「諒以遠矣」までの三十四句を第一節とする。

「故繫称旨遠辭文」。この文に「繫称」と明言してあるから、「旨遠辭文」は彦和が繫辭傳の句を用ひたのであることは疑ふ餘地もなく、又現に今の繫辭下にもこの通りの句がある。ところがこの「文」の字について梅本も黄本も「元作高」と校注し、唐写本は明かに「高」の字に作られてゐる（校勘記）。してみれば「高」は「文」の誤と簡単に断定してしまふわけにはいかない。或ひは彦和の據れる繫辭が自ら「高」の字になつてゐたのかも知れぬし、又彦和が「高」に改めて引いたのかも知れない。「辞高」の言ひ方は雑文第十四にも見える。

「言中事隱」。この四字で「言曲而中、事肆而隱」の意味を表はさうとしてをることに注意。

「而訓詁茫昧」。訓詁を唐写本は「詁訓」に作る（校勘記）。下文に「詁訓同書」とあるから、これも唐写本に従ふべきであらう。

「昭昭若日月之明、離離如星辰之行」。唐写本は「明」の上に「代」の字があり、「行」の上に「錯」の字がある（鈴木先生、敦煌本文心雕龍校勘記。以

下「敦本校勘記」と称す。当に唐写本に従ふべきである。尙書大伝に「子夏讀書畢、見夫子、夫子問之、何為於書、子夏曰、書之論事、昭昭如日月之代明、離離如參辰之錯行、商所受於夫子者、志之於心、不敢忘也」(類聚五五引)とあり、孔叢子、論書篇にも尙書大伝とほぼ同様の文があつて、亦「代明」「錯行」に作る。これらが彦和の本づく所であらう(尙書大伝は「參辰之錯行」に作るに、孔叢子は「星辰之錯行」に作つて彦和と一致する。彦和の拠れる所は孔叢子かも知れない)。唐写本「代」の字、「錯」の字のあるものに従ふべきことについては、楊明照の「范文瀾文心雕龍注舉正」、及び通檢本「文心雕龍新書」にも既に論じられてゐる。この「昭昭若……」の上に「書之論事」の四字を補うて解すれば、文義が一層はつきりしよう。

「詩主言志」。「主」を唐写本は「之」に作る(敦本校勘記)。書記第二十五に「書之為體、主言者也」ともあるから、これも「主」のまま、句としての意味は通ずる。しかし、この上下文が「易惟……」「書實……」「禮以……」の句法をとつてをる所から推せば、この句も「之」に作れるものが是ではないか。

「詁訓同書」は、「詁訓茫昧」が「同書」の意味であり、従つてそのうらには「通乎爾雅、則文意曉然」の意味を含んでゐると見るべきである。尙書につては「通乎爾雅、則文意曉然」と言ひ、詩につては「詁訓同書」と言へるは、練字第三十九に「夫爾雅者、孔徒之所纂、而詩書之襟帶也」と言つてをる立場からの意見である。

「摛風裁興」の「風」は風雅頌を、「興」は賦比興を、それぞれ代表してをる。そして「風を摛(の)べ興を裁(た)つ」、つまり六義によつて「藻辭譎喻」となつてをるのである。毛詩大序に、「詩有六義焉」とおこして、六義のことを述べてをり、それにつづけて「主文而譎諷、言之者無罪、聞之者足以戒」とある。その辺がこの「摛風裁興」以下二句の本づく所であらう。

「故最附深衷矣」の「故」を「敢」に作れる本がある(嘉靖本)。それにつづいて趙万里、説を為して曰く「敢即最之譎而行者、御覽六百八引亦無敢字、

黄本改作故、非是」(范注引)と。趙説是である。唐写本亦「敢」も無く、「故」も無い。ただ「故」に改めたのは黄本に始まるのではなく、梅慶生音注本も閔繼初刻本も、既に「故」に作つてある。

「採掇生言、莫非宝也」。唐写本、御覽並に「生」を「片」に作る(校勘記)。「片」の字に従ふべきである。「採掇」の主語を「礼」の撰者とするべきか、「礼」の読者と見るべきか、迷うのであるが、予は前者をとりた。この「宝」も亦、宝玉の意である。

「一字見義」の句は、范寧、春秋穀梁伝序の「一字之褒、籠論華充之贈、片言之貶、辱過市朝之撻」や、杜預、春秋左氏伝序の「春秋雖以一字為褒貶……」を念頭に置いて書かれたものであらう。ところで、「春秋弁理、一字見義」以下の構成であるが、少くとも口調の上では、「春秋弁理、一字見義」(A) 五石六鶴、以詳略成文」(B) 雉門兩觀、以先後頭旨」(C) 其婉章志誨、諒以遂矣」(D) である。この口調に則して意味をとれば(A)は(B)と(C)とを概括して提示せるもの、換言すれば、「一字見義」を具体的に例示したのが「……以詳略成文」と「……以先後頭旨」であると解される。しかし又、「一字見義」は、例へば、隱公元年「公及妃婁儀父盟于昧」を公羊伝に「曷為称字、褒之也」といひ、隱公十年「疊帥師会齊人鄭人代宋」を公羊伝に「此公子疊也、何以不称公子、貶」といひ、莊公二十五年「陳公使女叔来聘」を左氏伝に「嘉之、故不名」といひ、倍公二十五年「衛公燬滅邢」を左氏伝に「同姓也、故名」といへるの類、即ち一字の使ひわけによつて褒貶の意を示すと見られる書き方を指せるものと解しきれぬこともあるまい。けれども予は前者の解をとりた。

「五石六鶴、以詳略成文」。范注に「陳先生曰、五石六鶴以詳略成文、文学志略字作備、与穀梁伝所云尽其辞合、不当作略字」とある。陳先生とは陳漢章と思はれるが予はその人の説を直接には知らない。それで范引に拠つて議論を進めるより外ないが、その所謂「文学志」とは王粲の「荆州文学官志」

のことであつて、実は陳氏は、太平御覽六〇八所引の文心雕龍の文をば、荊州文學官志の文だと誤解してゐた（といふよりも嚴可均の全後漢文に誤らせられたらしいのである。このことについては、既に楊明照の范文瀾文心雕龍注卷正に詳論せられてゐるから、今復びは贅しなない。それはとにかく、陳氏が「穀梁伝所云其辞」と引けるは、僖公十六年穀梁伝の文であつて（後出）、陳氏の説は、春秋の五石六鷁の記事をば穀梁伝では「其の辞を尽くせる」書き方と評してゐるから、本書のこの文も「詳略」ではいけない、当に「詳備」に作るべきだ、といふ趣旨である。通檢本の校注にも右の陳氏説を引用してゐる。しかしこの陳氏の説は恐らく誤であらう。なるほど本書の、この二句だけを眺めて、そして穀梁の文をその裏附にして考へれば、「詳備」でなくてはならぬと言へる。しかしながら、「以詳略成文」の句は、下の「以先後顯旨」の句と対を為してゐることに注意しなくてはならない。この二句が対をなしてゐる以上、下の句の「先後」の語に對する、上の句の語は、「詳備」では均齊がとれないのであつて、どうしても「詳略」でなくてはならない。而も唐写本をはじめ諸本均しく「詳略」に作られてゐて何の異同もない。陳氏の説は綿密ではあるが唯一つ御覽所引に「備」に作られてゐたのを餘りに重視し過ぎた憾がある。では彦和は春秋の「五石六鷁」の記事の、どこに詳と略との區別を認めたのであらうか。

春秋経、僖公十六年に「十有六年、春王正月戊申朔隕石于宋五」、「是月六鷁退飛、過宋都」とあつて、五石には月日が記されてゐるのに、六鷁には月のみ記されて、日は記されてゐない。そこで穀梁伝では、そのことについて「子曰、石無知之物、鷁微有知之物、石無知、故日之、鷁微有知之物、故月之、君子之於物、無所苟而已、石鷁且猶尽其辞、而況於人……」と評し、范寧の集解には之に注して「石無知而隕、必天使之然、故詳而日之、鷁或時自欲退飛耳、是以略而月之」と説いて、明かに「詳」「略」の字を使つてゐる。してみれば、彦和は恐らく范寧等の説に基づいて、月日並記を「詳」と言ひ月のみ記せるを「略」と言つたに違ひない。

「婉章志晦」。黄注・范注ともに、杜預春秋左氏伝序の「故發伝之体有三、而為例之情有五、……二曰、志而晦、……三曰、婉而成章、……」を引證してゐる。勿論それでも差支ないのであるが、左氏伝序のこの部分は、実は成公十四年左氏伝の文に抱れるものであること、孔穎達疏に指摘せる通りである。成公十四年の方には杜注があるから、ここにそれを引用して、読者参照の勞を省かう。

故君子曰、春秋之称、微而顯、志而晦（注、志記也、晦亦微也、謂曲言以記事、事微而文微）、婉而成章（注、婉曲也、謂曲屈其辞、有所辟諱、以示大順、而成篇章）、尽而不汙、懲惡勸善、非聖人、誰能脩之、

彦和の「婉章志晦」と左伝の原文とを、くらべて見ることによつて「婉章」といひ「志晦」といへるは、簡単な熟語ではなくて、実は「婉而成章」と「志而晦」とを、それぞれ約言したものであることがわかる。従つてその意味も、左伝の用法に準じて、解しなくてはならぬことになる。ところで「志晦」は杜注に従つて意味をとれば、それでよいが、問題は「婉章」の解し方である。このことは寧ろ左伝の「婉而成章」の解釈のしかた何如にかからう。杜預に従へば「成章」は「成篇章」の意味と見なくてはならない。ところがこの杜注が果して左伝を正しく解してゐるかどうか、頗る疑問である。何とならば、(1)「微而顯」(2)「志而晦」(3)「婉而成章」(4)「尽而不汙」と並べられてゐて、その(1)(2)(4)の「而」は皆逆接的用法であるのに、(3)の「而」のみを順接的用法と見るのは不自然であるから。又、「顯」「晦」「不汙」は皆、文章の書きざまについて言へるのに、「成章」だけを「篇章を成す」と解するのも不自然であるから。それでこの「婉而成章」の「而」も逆接的用法と解し、「成章」も文章の書きざまについて言へるものと見て、「章」を文章（あや）の意味と解すべきではなからうか。つまり「婉而成章」を「書き方は婉曲ではあるが、その趣旨はあきらかに出てゐる」の意味と解するのがよいやりに思ふ。履軒の左氏伝雕龍略に「章是文章之章、非篇章」といへるは、かかる意味にとつたのであらう。昭公三十一年の左伝にも「春秋

之稱、微而顯、婉而弁」とあつて、その杜注には「辞婉而旨別」といふ。この昭公三十一年の文は成公十四年の文とほぼ同じであるから、兩者の意味もほぼ同じでなくてはならない。今、成公十四年の「婉而成章」を右述の如く解すれば、昭公三十一年の「婉而弁」の意味とほぼ一致する。昭公三十一年の孔穎達疏に「此れと成十四年の婉にして章を成すとは其の事異なるなり」と言へるは、杜注を忠実に守つたまでのことであらう。

さて彦和は、左伝の「婉而成章」を果して杜注に従つて解してゐたものか、それとも他の解釈をしてゐたものか、遽に断定し兼ねるが、若し前者であるとすれば、この「婉章」は「婉にして篇章を成す」の意味と見なくてはならない。比興第三十六に「婉而成章」の句を使つてゐるが、その句の解釈についても、ここと同様に一応ひねつてみる必要があるであらう。

尙、彦和はここで「婉章志晦」の二語だけを使つてゐるが、その背後には左氏伝の「微而顯、志而晦、婉而成章、尽而不汙、懲惡而勸善」全体が控へてゐるものとして解すべきであらう。そしてこの「諒以遠矣」と、左氏伝の「非聖人誰能脩之」とを照らし合はせて味はうのも無駄ではあるまい。

この第一節の「易惟談天……書実記言……詩之言志……礼以立體……春秋弁理……」に述べられてゐる観方は、法言、寡見篇の「説天者莫弁乎易、説事者莫弁乎書、説體者莫弁乎礼、説志者莫弁乎詩、説理者莫弁乎春秋」といふ一団の説と恐らく直接の関係があらう。

「尙書則覽文如詭、……表裏之異体者也」。この六句を第二節とする。

この「尙書則覽文如詭」以下の四句についで、紀昀は「四語括尽兩經、然此上疑脫數句」。若し紀氏の説の如く數句を脱してゐるとすれば、その數句は易・詩・礼を概括して論じたものであつたとしても考へるより外あるまい。がしかし、上文「夫易惟談天」から「諒以遠矣」までに於て五經の文体の特色を各論してゐるのに、その上、ここに復び五經のすべての文体について概論したとすれば、論述が甚だどくなる。さういふ書き方は恐らく彦和の採らなかつた所であらう。そこで此の「尙書則……」以下の四句も、五

經文体各論のつづきと見て、五經の内でも、「言經則尙書、事經則春秋」（史伝第十六）といふ深い關係をもちながら、全く反対的な書き方をしてゐる二經だけをとりあげ、兩者を対照することに抱つて、聖文の殊致異体を明かにせんとしたものとして解したい。最近、劉永濟編著の「文心雕龍校釈」（中華民国四十三年台一版）を入手したが、劉氏も亦紀氏の脱句説に反対してゐる。

「此聖人之殊致」。「人」を唐写本は「文」に作り、御覽は「人之」の二字を「文」の一字に作る（校勘記）。「聖人」では、「殊致」「異体」の語と調和しない。「聖文」に作れるに従ふべきである。御覽は蓋し「之」の字を脱したのであらう。通校本校注にも言へる通り、「聖文」の語は微聖第二・史伝第十六にも見える。聖人の文章の意味である。

「至根柢深」から「河潤千里者也」までの十句を第三節とする。五經が古今を通じて文學の源泉であることをいふ。

「至根柢深」の「至」の下に、唐写本は「於」の字が有る（敦本校勘記）。有る者に従ふべきである。一体、提示の作用をする「至」は、その下に「於」の助辞を伴ふのが普通であつて、本書でも史伝第十六・通變第二十九・章句第三十四・比興第三十六等に於てその例を見る。此の「至」が提示の作用をしてゐることにいつては、下文で述べる。「深」を唐写本は「盤固」に作る。老子第五十九章に「深根固柢」とある通り、「根柢」について「深」とも「固」とも言ひ得るが、しかし「盤」（盆）は「盤」の意であるから、それと結びつくには「深」よりも「固」の方が適切であらう。但し「盤固」がどうして今本の「深」になつたのか、そのわけはわからない。或ひは、後人が「盤」を「蟠」の意と解して、その關係上「固」を「深」に改めたのかも知れない。「根柢盤固、枝葉峻茂」は荀秀第四十の「根盛而韻峻」と同じ意味であらう。「峻茂」は枝葉の徒に茂ることをいふのではない。重さは「峻」にかかつてをらう。

「往者雖旧、餘味日新」。唐写本には「餘」の上に「而」の字がある。無

くても意味は通ずるが、「一雖一、而」「雖一、而」の形式が常道であり、本書でも、この常道に従へる所が多いから、これも「而」の有る者が是である。今本は脱したのであらう。

「前修文用」。唐写本「文」を「久」に作る。従ふべきである（校勘記）。「久用」は「追取」に対する。「文用」では意味をなさない。「文」「久」文字似て、今本が誤つたのである。通校本は曹學佺の説等に従つて、「運用」に改めてゐるが、改悪である。

さて「至於根柢盤固……事近而喻遠」について一つの疑問がある。先づ此の「至」は、その直下のことを提示する機能を営んでゐるものと見られる。さうするとその下の文は、この「至」に率ゐられる提示の部分と、その提示の部分に対する説明の部分とから成らねばならない。ところが下文のどこまでが「至」に率ゐられる提示の部分であらうかと考へながら読んで行くと、どうもそれがわからない。結局「根柢盤固……事近而喻遠」の四句すべてが、「至」に率ゐられてゐると見るより外ないやうである。さうだとすれば、この四句から成る提示部に対して、どこが説明の部分であるのか。困つたことにはそれが全く見つかからないのである。そこで甚だ武断ながら、一つの臆見を述べれば、「事近而喻遠」の下に、説明の句若干を脱してゐると見ざるを得ないかと思ふ。このことは、論述の筋をたどつてみることに拠つても言へるやうである。

今「夫易惟談天、入神致用」から、「可謂太山徧雨、河澗千里者也」までの論旨をたどつてみるに、「夫易惟談天、入神致用」から、「此聖文之殊致、表裏之異体者也」までの四十句（第一・二節）は、五経の文章のそれぞれの特徴を分論してをり、「至於根柢盤固、枝葉峻茂」から、「可謂太山徧雨、河澗千里者也」までの十句（第三節）は、五経の文章の共通点を総論してをるやうである。ところで、その分論から総論へと転廻する文句はどれであるかと言へば、それは「至於根柢盤固、……」に外ならない。換言すれば

「至於根柢盤固、……」を以て五経の文章の共通点を提示し、それに拠つて、今まで分論してきた筆致を転廻させてをるのである。かう見ると、「至」に率ゐられる「……事近而喻遠」の下に、「これが五経共通のことである」といふ意味を述べた文句が有るべきはずではなからうか。このこと同じやうに、分論から総論へと転廻してをる論調を本書内に求めれば、例へば、通変第二十九に、黄帝・唐・虞・夏・商・周の各時代の歌詩の特色を分論して「黄歌断竹、質之至也、唐歌在昔、則広於黄世、虞歌卿雲、則文於唐時、夏歌雕墉、辨於虞代、商周篇什、麗於夏年」と言ひ、それから筆を転じて「至於序志述時」と提示し、続いて「其揆一也」と言つて、直上に提示せることが各時代に共通せる点であることを説明してをる。右に挙げた通変篇の「至於序改述事」に当るのが、此の宗経篇の「至於根柢盤固、……事近而喻遠」の四句であると思ふが、通変篇の「其揆一也」に相当する文句が、此の宗経篇には無い。それで、その文句は、もとあつたものが、伝写の際、脱落したのではないかと思ふのである。宗経篇の此の文を鄙見の如く解する時は、「至」の率ゐる句が長きに過ぎると或ひは人あつて疑うかも知れない。しかし、史伝第十六・比與第三十六等にも四句を率ゐる例があり、序志第五十には六句を率ゐる例もある。

「可謂太山徧雨、河澗千里者也」。「太山……」の二句は僖公三十年公羊伝に拠れるものなること、黄注の引証せる通りであるが、ここでは五経の文章が後の文章に及ぼせる影響の大なることに喩へてをる。だから、次の段に「故論說辞序、……」と承けてゐるのである。

「故論說辞序、則易統其首……正末帰本、不其懿歎」（第三段）

此の段は経を宗とすべきことを正面から論ずる。三節に分けて見る。

「故論說辞序」から「煮海而為塩也」までの十八句を第一節とする。後世の諸文体の源がすべて五経の文章に在ることを論ずる。

一体、文章の段節を区分することは、読解の便宜を図るが為であつて、必

すしも絶対的なものではないが、それにしても、この節の分け方には一つの問題がある。そしてそれは校勘の問題とからむ。

……所以百家騰躍、終入環者也。」若稟經以製式、酌雅以富言、是即山而鑄銅、煮海而為塩也、「故文能宗經……」

右の文を読んで行くと、「終入環内者也」で節を分つべきか、はた「煮海而為塩也」で分つべきかに、一寸迷ふ。つまり「若稟經以製式、……煮海而為塩也」の四句を、上文により密着させて解すべきか、それとも下文により密着させて解すべきかに迷ふのである。ところが、唐写本では、「環内」の下に「者也」の二字が無くて、「為塩」の下に「者」の字がある（敦本校勘記）。そこで唐写本に従へば「終入環内」で分たずに「煮海而為塩者也」で分つのが自然のやうである。ただししかしそれが果して彦和の旧を伝へたものか、否かについては、一応検討してみる必要があらう。今、岡村繁編の索引及び漢学研究所の通検を利用して、彦和の「若」（仮定乃至条件的提示を表すもの）の字の用法を調査すると、「若」に率ゐられる文の上には、「……者也」とか「……也」とかの強いひびきをもてる句は、来ないのが普通である。その内から、ことやや相似た論調のものを示せば、「故才高者苑其鴻裁、……董蒙者捨其香草、若能憑軾以倚雅頌、懸轡以馭整篇、酌奇而不失其真、翫華而不墜其実、……」（弁騒第五）、「於是習華随修、流通忘反、若能確乎正式、使文明以健、……」（風骨第二十八）、「然……夸過其理、則名実兩乖、若能酌詩書之職旨、翦揚馬之莖秦、……」（夸飾第三十七）等がある。これは彦和の筆致の特色といふよりも、「若」の本質がさうさせるのかも知れない。ともかく、少くとも彦和の文に於ける、「若」とその上文との関係は右述の如くであるから、この「若……」の上の句も「者也」の無いのが是である。今本は恐らく、上文の「可謂太山徧雨、河潤千里者也」の形に涉つて加へられたのであらう。そして又一方では「煮海而為塩」の下の「者」の字を脱したのであらう。

右述の理由に拠つて、「……煮海為塩者也」までを第一節とする。

「故論說辞序、則易統其首」。「序」は「論」体的一種として論說第十八に見え、「辞」は論說篇には見えずして、書記第二十五に見える。

「紀伝銘檄、則春秋為根」。「紀」を唐写本は「記」に作る（校勘記）。「記」だと、「右史記事、事為春秋」に拠つて、「記」を以て「史」を表はせるものといふことにならう。しかし、諧調第十五・事類第三十八等に、「紀伝」の例があるから、これもこのままでも通ずる。「銘」は既に上文に出てゐるから、ここに重出すべきではない。唐写本は「盟」に作る（校勘記）。従ふべきである。祝盟第十に盟の最古の例を春秋左氏伝から挙げてるので、これも「盟」に作つたものがかしこと一致する。

「並窮高以樹表、極遠以啓驪」。「並」は一樣に総括するのでなく、それぞれの個性を認めて概括する言ひ方。「樹表」は「立表」「植表」等と同義で、標識（めじるし）をたてること。「窮高以樹表」とは、文体についてそれぞれ最高の水準を示してをることをいふ。尙、「樹表」の語は淮南子、天文訓に見える。ことと直接関係があるわけではないが参考までに。「啓驪」は「拓境」「拓宇」等と同義で、領土をひろげること。「極遠以啓驪」は文体の範圍を最大限に広めてをることをいふ。この二句で、五経の文章は、各文体の最高であり、且つすべての種類を含んでをることをいふ。それで「だから百家すべてこの範圍を出ることが出来ない」と、次の文が承けるのである。ここにも五経の文章を絶対視する彦和の考が、あらはにされてゐる。尙、范注では、礼記楽記の「窮高極遠」を引いてをるが、楽記鄭注には「高遠三辰也」とあつて、「高」も「遠」も天空について言へるものと解されてをる。少くとも鄭注に従ふ限り、楽記の「遠」はこのことその用法を異にする。

「所以百家騰躍、終入環内」。「百家」は諸子百家である。時序第四十五にも諸子のことを単に「百家」と言つてをる。この「騰躍」には、百家が五経以上に出ようとしてといふ氣持がこめられてゐるかと思ふ。この言ひ廻しは、通變第二十九の「雖軒翥出轍、而終入範圍」と同じである。「百家騰



「羅」は上句の「窮高以樹表」を受け、「終入環内」は上句の「極遠以啓疆」を受け、漢書芸文志に諸子を評して「今異家者、各推所長、窮知究慮、以明其指、雖有蔽短、合其要歸、亦六經之支与流裔」と言つてをるが、彼は思想についての論であり、此は文章についての論である。

「若稟經以製式、酌雅以富言」。この句の上に「かういふわけだから」といふ意味を補うて見よ。この「稟」は、下句の「酌」に対してをるから、賜穀（説文、稟、賜穀也）の意味をほした用法であらう。乃ち、經文から最も大切な、を受けるといふ氣持で、この字を使つたのではないかと思ふ。

「式」は体式（体式の語、体性第二十七に見ゆ）で文章の体格、姿態をいふ。すがたでも訳すべきか。「製式」の「製」を唐写本は「制」に作る（敦本校勘記）。神思第二十六に「制體」とあるから、これも「制」の字が是であらう。「雅」は爾雅であらう。練字第三十九に、「雅（爾雅）以淵源詰訓、

韻（合韻篇）以苑囿奇文、；該旧而知新、亦可以屬文」とある。「是仰山而鑄銅、煮海而為塩也。」「仰」を唐写本は「即」に作る、（敦本校勘記）。是である。今本の「仰」は「即」の字の誤である。「即山……」の二句は、楊明照も既に指摘せし如く、史記・漢書の吳王濞伝及び漢書の晁錯伝に見る所の「即山鑄錢、煮海為塩」（史記吳王濞伝、「海」の下に「水」の字あり）に本づけるものである。抱朴子、外篇、広譬第三十九にも「鑄山而煮海」とあるから、史記・漢書のこの句はしばしば文人の利用するところとなつたもののやうである。

この「即山而鑄銅、煮海而為塩」は文を作る者にとつて、經書は無尺箴の宝库であることを譬喩的にいつたのであつて、前段の終りに「太山偏雨、河潤千里」の譬喩を以て經書が文を作る人人に対して無限大の恩恵を与へるところをいつたのと、相呼応してをる。

さて發軔の文章流別論、李充の翰林論は今見るを得ないが、嚴可均所輯の殘文に抱つてその一斑を窺うに、その論には時に文体の起源を述べた所がある。しかしそれは徹底したものではなく、而も、各文体に行きわたつて述べ

られてゐたものか否かも明かでない。それで、各文体にわたつてその根源を考へ、而もその根源を五經の文章に求めたのは、彦和のこの論が恐らく最初であらう。尤も彦和のこの論は既に紀昀も評せる如く、全面的に是認してよいかどうか問題であらう。けれども、われわれはここに彦和の真摯な態度を見得るのである。乃ちこの文体溯源は、ただ溯源そのものを目的とせるのではなくて、実は各文体の本質を明かにせんが為の溯源なのである。文体の本源をたどり、変遷を究めて、そこから、文体の本質を明かにしようとする彼の態度は、本書の到る処に見られる。

「故文能宗經」から「謂五經之含文也」までの十句を第二節とする。五經を宗とすることによつて生ずる文の長所をいふ。「體有六義」。この「體」は、文章をその形式と内容との渾然たる姿に於て捉えた姿のことであらう。

「六義」の中に見える所の「情」「風」「事」「義」「體」「文」といふ語の概念を明かにし、この六概念相互の關係を究めることは、彦和の文學論を知る上に甚だ大切である。しかしこのことについては改めて詳考する機会もあらうから、今は極めておぼざつばな意見だけを記すにとどめる。「情」とは、創作衝動によつて取り挙げた作品の内容のことらしい。「風」とは主として「情」から發する風趣とでもいふべきもの、つまり主として「情」のただよ

わす氣分のことであらう。「事」とは、作品内容を成立させる事実、即ち今の「素材」の語に近い意味かと思ふ。「義」とは作品にこめてある趣意乃至はずみのことではなからうか。「體」とは作品の体格、今の「形式」に近い意味と解してよからう。「體有六義」の「體」とは別である。「文」とは、形式を構成してをる「表現」と見れば当らずと雖も遠からずであらう。

これらの六つは常に相関聯してをるが、中でも、「情」と「風」とは表裏の關係をもち、「事」と「義」とは密接に結びつき、「體」と「文」とは全体と部分との關係に立つといへようか。

「夫文以行立」から「不其懿歟」までの十二句を第三節とする。後世の

文、経を宗とするもの少きことを歎く。

「四教所先、符采相濟」。『四教所先』は論語、述而篇に「子以四教、文行忠信」とあつて、「文」と「行」とを先に揚げてをるをいふ。この二句は、「然るに」の語氣を孕んで、次の「邁德樹声……」につづく。ところで問題となるのは「符采」の意味である。この二句をすらりと読めば、「符」は「行」を承け、「采」は「文」を承けたものと見られ、この二句の意味は、（文は行を以て成立し、行は文を以て伝へられるが）、この文と行とは、四教でも先に挙げられてゐて、内実となり、外形となつて、互に助け合ふ」といふことのやうに取れる。ことと相似た表現が詮賦第八にある。即ち「麗詞雅義、符采相勝」がそれであつて、これ亦「符」は「雅義」を承け、「采」は「麗詞」を承けてゐるやうに見える。ところが、原道第一の「符采復隱、精義堅深」、詔策第十九の「潘岳九錫、典雅逸群、衛覬禪誥、符采炳耀」、風體第二十八の「才鋒峻立、符采克炳」の「符采」は、「精義」「典雅」「才鋒」とそれぞれ対用せられてゐて、何れも二字一語を為し、決して「符」と「采」とに分けられない。この語の本書以外に於ける用例を探せば、魏の曹丕の車渠椀賦、曹植の七啓、晋の傅玄の乘輿馬賦、左思の蜀都賦、抱朴子の博喻篇・正郭篇、その他六朝の作品に屢ば見出されるが、何れも二字一語を為してをる。そしてその意味は、玉の光采、又はそれに準ずるものをいふやうである。されば蜀都賦の旧注に「符采、玉之横文也」とあるのも、さこそと背ける。かういふわけで、今のところ、「符采」を「符」と「采」とに分けて解釈出来る用例は、末だ一つも見当らない。さうするとこの「符采相濟」は「この文と行との二つが互に表裏となつて符采をなす」といふやうな意味と見なくてはならぬのではあるまいか。尙、符采の語義については、胡紹瑛の文選箋証、蜀都賦のところに委しく説かれてゐる。

「励德樹声」はこのままでも意味は通ずるが、唐写本の「励」を「邁」に作れるに従ふべきである。鈴木先生は「案尙書大禹謨、皋陶邁種德、偽孔伝、邁行也、樹声語本書畢命、邁德亦必用大禹謨語、邁字是也」（校勘記）

と言つてをられる。尙、「邁德」と「樹聖」とを連ね用ひた例は、魏の呉質の在元城与魏太子牋に「若乃邁德種恩、樹之風声、使農夫逸豫于疆畔、女工吟咏于機杼、固非質之所能也」とある。彦和のこの句と直接関係のあるのは、案外、呉質の用法であるかも知れない。そして、彦和が「邁德樹声、鮮克宗經」を書いた時は主として魏の文士を脳裡に思ひ浮かべてゐたのかも知れない。

さて「邁德樹声」の意味であるが、「邁德」は偽大禹謨の伝に従へば「徳を行ふ」と解すべく、「樹声」は、偽畢命の本文及びその伝に従へば、「民の風声を樹つ」と解しなくてはならない（畢命の擲り所と思はれる左氏伝、文公六年の用法もほぼ同じ）。つまり、「邁德」の「徳」はこちらのものであり、「樹声」の「声」はあちらのものである。ところで、彦和がここに「邁德」と「樹声」とを連用したのは、「己の徳を行つて、民の風声を樹てる」の意味ではなくて、「徳」も「声」も己のものとしての使ひ方のやうである。その点、前引の呉質の牋の用法と同じかと思ふ。

「是以楚艶漢侈」。通麥第二十九にも「漢楚侈而艶」とある。楚辞の艶なることについては、弁駭第五にも「擢艶而采華」・「奪采絶艶」・「中巧者獵其艶辞」と見える。

この第三節は、徵聖第二の終りの「天道難聞、猶或鑽仰、……」とほぼ同じ趣旨である。論述のしかたも似てをる。

「三極藝道、訓深稽古」。鈴木先生の校勘記に曰く「三極藝訓、已見正文、此道訓二字疑錯置」と。この説従ふべきである。「道深稽古」とは、「その道は深遠であるので古を稽へてはじめて明かになる」との意味でもあらうか。「道深」は本文の「然而道心惟微、……無錚錚之淵響矣」の辺に当らう。

「致化婦一」は、このままでも勿論意味は通ずるが、唐写本の「婦」を「惟」に作れる（敦本校勘記）に従ふべきであらう。その方が、下句の

「分教斯五」の「斯」とよく対するから。

「性靈鎔匠」は本文の「洞性靈之奥区」や「義既埏乎性情」に当り、「文章奥区」は本文の「極文章之骨髓」や「辞亦匠於文理」に当らう。

A Commentary on "Wen-Hsin Tiao-Lung" 文心雕龍(3)

Rokuro Shiba

"Wen-Hsin Tiao-Lung" (10 vols) is a work written towards the end of the fifth century; it is the earliest description on literature and rhetoric in China. This work, therefore, occupies the most important position in the history of Chinese literary criticism; yet it has not prevailed so much because of its having many difficult points. Both the terms and the style of writing are very hard to understand, and especially the sentence-construction is so complicated that main difficulty seems to be here. In proceeding my research, I studied first the peculiarities and characteristics of the thought and style of the author of this work and made commentaries on the unique terms and sentence-construction, which I compiled in a form of book. This is a Commentary on Wen-Hsin Tiao-Lung, A part of my studies was Published already in "SIN-AGAKU-KENKYU" NO. 10, 12, which this article follows. The present study will be published in due course.